K121.1
1a
1

31
8
72

尋常小學校教師用

# 修身書

第一

大日本教育會古籍館
一 三函
二 架
九 七號
八 册

K121.1
1a
1

明治二十年六月再版

No 4660

辻敬之
岡村增太郎 同編

尋常小學校教師用

# 修身書 第一

明治二十年六月
教育書專賣所
普及舍

## 例言

一此ノ書ハ兒童ノ德性ヲ涵養シテ日常ノ作法ヲ敎ヘ兼テ尊王愛國ノ道ヲ知ラシメンガ爲內外古今人士ノ善良ナル言行ヲ輯錄シタルモノナリ

一兒童ニ修身科ヲ敎フルニハ談話ニ由リテ敎師自ラ言行ノ模範トナラザル可カラズ故ニ此ノ書ハ分チテ敎師用ト生徒用トノ二種トナシ敎師用ノ書ニハ事柄ヲ掲ゲ生徒用ノ書ニハ其ノ圖畫ヲ掲ゲテ談話ヲ聞クノ傍之ヲ目擊セシメ又其談話ニ對スルノ格言ヲ載セテ之ヲ記憶セシムルモノトス

一敎師用書ノ上欄ニ問答ヲ設ケタルハ敎師ガ談話ノ際往往此ノ法ニヨリテ兒童ノ心意ヲ開誘スルニアリ又生徒用書ノ上欄ニ事柄ノ大意ヲ掲ゲタルハ兒童ガ父兄ニ依リテ復習シ若クハ他日自ラ誦讀シテ敎師ノ談話ヲ再憶セシムルニアリトス

東京帝國大學圖書之印

## (一)身を捨てて子を救ふ　(恩愛)

歐羅巴のある國にブラックといふ婦人ありある時稚子を背負ひて他所にゆきしに折しも冬の事なれバそのかへりに雪ふり出し次第次第に吹雪ハげしくして暫時が間にあとさきもみわかぬ程になりければ哀むべしこの婦人遂に雪路にたどりなやみて我が子をわきにかきいだきたるまま路の傍にたをれふしぬされバ稚子はわうとさけびて泣き出せバ母も共に泣

（問）父母ハ其子ヲ愛スルコト我身ヲ愛スルヨリモ深シ子タルモノ亦父母ヲ愛スルコト深カラズシテ可ナルヤ如何

きさけびてたゐ入るばかりの心地おがらも已のきたる衣をぬぎて稚子を覆ひ暖むる程にさらぬだに堪へがたき雪天に素肌にて立つおればおにかは以て堪まるべき其の身ハ遂にひゐ凍りあへおき最後を遂げたりとぞ子の危きに臨むときハ已の命をそつるを惜まず親の子を慈しむは至れりといふべしされば人の子たるものは一日も父母の恩を忘るべからず

（恩愛）

## （二）慈熊



羽後の國鳥海山の麓に獵人あり一日銃をたづさへて山にのぼりハるか谷間を見れろそに一疋の大熊ありて大石をいだき擧げまた一疋の子熊ありて頭をその石の下に差入れて居るを見たりおれ母熊のその子に澤蟹を拾はせんとて斯く石を抱き起したるおり獵人はよき獲物おりと銃押向けねらひを定めてどうと放てばそおおもたがはず大熊の月の輪の眞中を打貫きたり然るに彼の熊ハおをハじめの如く大石

を抱きたるまま動かざれバ獵人は深くあれを
あやしみ徐に山を下りてあれを見るに熊はそ
でに死したれども子熊の石の下へ布れて忽微
塵とからんあとを恐るるが故に死後に至るま
で子を思ふの一念凝り固まりて斯くせしもの
かれバ獵人も大に感悟し吾はあのあさましき
業をかし生物の命をとらんよりは以來は心を
改めて他の業にうつらんものをと發心して是
より農夫とかりたりとぞ





## 格言

大和俗訓に曰海山は限りあれども父母の恩は限りなし

### 參照

嘗て獵人あり山に入りて一牝猴の子を抱て食を覓むるを見て彈をるに火鎗を以てを直に其胸に中る猴痛を負ひて木に緣り子を撫でて怒號し血を吐て死に瀕し力めて其子を高枝の梢に擲ち遂に昏絶して地

に倒る兒枝を抱て悲叫し殊に惋惜をるに堪たり獵人爾後また此業をとらずと云ふ

## (三)孝鼠其親を負ふか

(孝道)

亞米利加紐育の商船曾て西班牙國の里斯本へ向けて航海せしとき船中に鼠多く蕃殖しけれバ硫黄を薫べて之を鑒殺せんとせしに一疋の鼠の一鼠を背に負ひ蹌踉として甲板上に驅け出たりしかバ人人は不思議といぶかしみ打寄りてこれを見るに負はれたるハ老鼠にして兩

(問)鼠ヲ鑒殺セントセシトキ一疋ノ鼠老鼠ヲ負テ走レリ鼠ノ老鼠ヲ負ヒシハ如何ナル意ナルベキヤ



眼盲いたりされバ負ひたるは子鼠なるべく今の危難に際して其の親を安心の地に避けしめんとをるに疑ひなしとていづれも感歎して放ちやりしとぞ鼠ハ人家に害をなして憎まるるものなれど斯く親に孝なるものあり感ずべきことにこそ

## (四)親子の愛情

(孝道)

昔こ一貴人ありてある川の堤を徘徊したるに一葉の小舟に棹さして岸邊を指して漕寄をる

（問）貧賤ナリト雖父母ヲ敬愛スルノ禮ヲ忽ニスベカラザルヤ如何

ものあり漸く近づくままに誰にやと見てあれバ一人の賤の男妻とれほしき婦人と老たる婦人とを伴ひたり老たる婦人には毛氈かどを打着せて其の爲體如何にも心を添へたりと見ゆるにおの賤の男如何にかしけん片足に疵を負ひて歩行も頗る難ましき體なるが頓て岸に登り木の枝をあつめて焚火をおこし再び小舟に立返りて老いたる婦人を負ひ來り靜に焚火のほとりへれらしめ偖何やらん食物を調へておれ



を其前に供へたるが其の食し畢る迄は夫婦とも恭しくその傍へに侍りて如何にも敬ひたる氣色おりけれバ貴人は思はずも其厚情にして且禮義あるさまに感じてしづしづと其のほとりへ歩みよりて其の年老いたるは何人にやと尋ぬるに賤の男は最笑ましげにておれおそやつがれのいと大切おる母にて候といひけるとかやおの賤の男身おそ賤しけれ其の心は貴人にも劣らずといふべし誠に父母を愛し且おれ

を敬ふことは誰もこの賤の男の如くにおそありたけれ

## 格言

孝經に曰人の行は孝より大なるはなし

## 參照

對馬の人陶山訥菴痩弱にして寒を怯る六歳のとき肯て襪を着けず人之を問ふ曰く母手親から製を安ぞ之を足に加へん





## (五)馬と買客のはなし

(交友)

(問)横着馬ト馴レ親ムハ良馬ナルヤ否

ある人一疋の馬を買はんとせしがまづ試驗のため一兩日借り置くべしとて我家の厩に入れ置きさて翌朝にかりて乘りだめしをせんと厩に至りて見れバ彼の借り置きたる馬は舊くより蓄ひ置く横着馬を友として睦ましげにあそび居たれバ此上は乘だめしをかを迄もかしとて直におれを賣主の許へ歸したれバ賣主は大きに不審かしみ扨もいつの間に試驗を致され

しといふに否とよ最早試驗には及び申さず昨宵一夜厩に入れ置きたるにあの馬の友達にしたる馬の性質によりて試驗したりといひけるとぞ人の性質は朋友の善惡によりて知らるるかれバ友ハ善き人を擇ぶべし

## (二八)交伯母の教を守りて盛德を爲す

(交友)

支那國魯の孔父文伯ある日友と共に堂にのぼる其の母敬姜かれを見るに友人みな文伯を尊



(問)己レニ勝ラザル友人ハ己レニ益アルカ如何

敬して或は其の劍を持ち或はその履を取りて恰も父兄に事ふるがごとくかりけれバ母急ぎ文伯を喚びて責むるようは古の聖主明君は國中の人悉く臣下かれども我に從ふ人は我に益かしとて賢人あれば敬ひ尊みて臣下の如くにも遇せられず身をへりくだりてかれに師とし事へんかとを願ひ給へり今汝年若く位卑く才もまた足らざるに其の交る友を見れバみな汝より位卑く才劣れる人かり汝彼等の從ひ敬ふ

（問）朋友ハ撰ンデ交ルベキモノ歟如何

を悅びて我が身を足れりと思はば學問進むことなく德行日日に衰ふべしとかたく誡めけれバ文伯其の誡を守りて是より友を撰みて已れより優れる者にのみ交りけれバ德行まさまさ脩り學問いよいよ進みてついに其の名天下に顯はるまでにいたりけるとかん論語にも己に若かざるものを友とせることと勿れと見えたり已れより劣れる者にのみ交れバ損ありて益なし人若し務めて己より優れるもののみを撰み



て交らバ言語動作皆已の規矩となりて自然に親炙薫陶せられ才智進み行狀脩りて賢才の人となることと難かるまじきなり

## 格言

古語に曰水は方圓の器に〜たがひ人は善惡の友による

## 參照

後漢の黃憲年十四荀淑黃憲を見て之を異として曰く子は吾が師表なり戴良才高し

憲を見て歸る毎に惘然として自失するが如し其母の曰く汝牛醫兒に從て來るかと陳蕃等相謂て曰く時日の間黄生を見ざれバ鄙吝の萌復心に存せと

## (七)山野羊と飼野羊

(廉潔)

冬の日の空黯淡と搔曇りて山卸しの風雪を誘ひて瞬く間に野も山も一面の銀世界とかるバかりかれバ野羊飼男は野に飼付たる野羊を追纏めて柵の中に入れんとするにいつの程にか



りけん柵の中には數多の山野羊のいと肥にて大きやかなるが二三十匹降頻る雪を避けんとや一塊に集り居たり野羊飼斯くと見るより俄に利慾の心を起して思ひけるハ我が飼付の野羊に較ぶれば遙に肥に勝りたる山野羊共の斯く夥しく我が柵に入り來りしこそ思ひ設けぬ利得かれされバこの大野羊を此ままに飼付けんには丹誠して我が持野羊を育つるよりも面白しいで〳〵といひつつ跡先勘辨もかくいま

(問)慾心深キ人ハ竟ニ已ガ意ヲ逞クスルコトヲ得ル歟如何

我が野羊の雪庇の料にと携へ來りし束ね藁を以て悉く山野羊の雪庇とおし今まで飼狎したる野羊どもには目も掛けず其儘に打捨置きて家に歸り翌朝におりて雪も晴れ朝日も麗かに照り渉りぬれば野羊飼は疾より起き出でて扨昨日の大野羊共は如何にせしと柵の内を見るにおば如何に殘りおく逃げ去りて影も形も見ねざればおは仕損じたりさるにても元來飼付けし我が野羊共は如何にせし昨夜の寒さに雪



庇もおさざりしかば若しや寒ゐやしぬる病みやしぬると狼狽眼におりてれちおちを見廻るに果せる哉飼野羊は雪におやみ飢ゐに勞れて處處に倒れ伏し一匹も殘らず死に失せたりとぞおの飼野羊要もおき慾心を起しより既に山野羊を取失おひ又我が在來の飼野羊を失ひ空しく世の胡笑とおりぬ總じて他人の物を羨む者は遂に我が所有をも失ふに至る戒むべし

## (八)水中の肉を羨みて口裏

## の肉を失ふ

（廉潔）

（問）大慾ト無慾トハ孰レカ利益ナルカ

ある家にて鰹魚の頭を犬に投げ與へたるに犬はこれを得て大に喜び引啣へて何れへか持ち往かんと急ぎ小川のほとりを走るときふと水中を見れバ此にもまた己と同じ程なる犬の同じく鰹魚の頭を啣へて走せ往くあり是れ己が影の水に映りたるなるに無智の犬は夫とも知らざれば忽盗心を生じて水中の犬の啣へたる頭をも奪ひ取らんとや思ひけん嘐と吼りて矢庭に水中の肉へ噬み附けば今まで己の持ち居たる頭を水中へどんぶり落して水烟の起つと齊しく水中の犬も頭も消へて見にずゐりたりといふはの犬また前の野羊飼に似たりと云ふべし



## 格言

### 二兎を追ふものは一兎を得ず

### 參照

嘗て獵人あり山に入りて二兎を見る二つ

かがら之を獲んと欲し急に之を追ふ一兎東に走り一兎西に走る竟に一兎をも獲ずして還る

## (九)正直の少女

（廉潔）

或る飢饉年のあとありしが一人の富豪村内の極めて貧窮なるものの子供をあつめ一つの大嚢を示して此の中に麪包二十あり汝等一づつ取行くべしやがて世の中の好くなるまでは毎日斯く我が家にきたりて取り行くべしといひ

（問）人若シ汝等ニ物ヲ與ヘントスル時ハ汝等ハ爭テ其大ナルモノヲ取ランカ將タ退讓シテ徐ニ之ヲ取ランカ

ければ子供は喜びて我先きにと嚢に手を入れいづれも容の大なるを爭ひ取り禮謝もせずして歸り去りしがその中ロースといへる女兒あり子供の麪包を取らんと爭ふ時は打ち雜らずして獨傍に避け皆取り去りたる後に其の殘りたる最小き麪包をとりさて主人に向ひて慇懃に禮謝して歸り往きぬ此の如きあと數日いつも最後にありて小さき麪包を取らざるはかしある日並の容よりは半分程も小さけれども更

に怨める氣色もなくこれを受けて歸りける扨我が家にいたりてこれを其の母へ渡しけれバ母やがて庖刀を以てこれを割らんとせしに中より燦爛たる銀錢の出でしかバ母は大に打驚きローズを呼びこの金錢は麪包を燒きたるとき誤りてこの中に入りしならんといふにローズも共に驚きて急ぎ彼の家にはしり往きて右の趣を述べ銀錢を返しけれバ主人ハいと笑ましげに頭を打ふり否否夫は誤にはあらず汝の



善良温順なるを賞して我汝にこの銀錢をあたへんとし故意と小さく麪包を燒き其の中に容れ置きしなりといひて大に其の行儀を譽めけるとぞ人正直を守るときは幸の來らざることなしこの少女學校の教育を受けしや否やは知らざれども其の心正直を守りて敢て非分の榮利を貪らず謙遜して禮節を正しくするはあはれ教育を受けたるものといふべし主人の銀錢を與へてこれを賞するも宜なるかな

# （一〇）遠路主を問ふて遺金を返す

（廉潔）

（問）已レ貧シキトキ遺金ヲ得バ取テ以テ其窮ヲ救ハンカ將タ不義ノ利ハ願ハザランヤ如何

日向の國那珂郡熊野村に鬼束忠兵衛といふものあり其の家元來貧寠にして父は忠兵衛の幼年のころ身まかりただ一人の母に事へて孝心深かりきある時所用ありて他出したる途中にて金銀多く入りたる財布を拾ひしが忠兵衛固より正直にして私欲の心おかりしかば速に落したる人を尋ねてこれを返さんと思ひ近村近郷を廻りて尋ね歩きたれど我落したりといふものおし然るに或る人云ひけるは此のあたりの人斯る大金を持つべきにあらず是かからず城ヶ崎の庄右衛門なるべし彼の人過ぐる日我が村を通行したるを見たりといふを聞くより忠兵衛直に山路四里餘りを經て城ヶ崎に至り其の地の豪家と聞こえたる南村庄右衛門の家を尋ねて面會したるうへ落し物の事をいふに誠に落したるに相違なしといふにぞ忠兵衛はそ

ぐさま懐中より財布を取り出して返せしかば庄右衛門懇に禮をのべておれを受取り扨次の日使の者に進物を持たせて忠兵衛の家を音おはせしに殊のほかの荒屋おりしかば使大に驚き歸りて此事を語るに庄右衛門深く感じ入り斯る正直の人を貧窶に苦しまもるおと本意おらずとて乃忠兵衛の負債は已代りて悉くおれを償ひ且生計にも不足なきやう補助したり此の事天明八年にありとかや





格言

西諺に曰正直は幸を生むの母なり

参照

北齊の張元南隣に二杏樹あり杏熟して多く元が園中に落つ諸の小兒競ひ取て之を食ふ元得る所の者を送りて其の主に還へを

## (一一)馬と財嚢

(仁愛)

〔問〕仁愛ノ人ニ接スルコト久シケレバ如何ナルモノニテモ其薫陶ヲ受クルヤ否

波蘭國の將軍コスシツコといへる人は至つて慈善の心深き人なりある時懇意の人の許へ用事ありて使を遣はしたるが路のほど遠けれバとて常常我が乘る所の馬に騎らしめて出したるに使者の既に用事を果して歸り來りコスシツコに向ひて返事の趣を述べ畢り扨向後主公の馬を借り奉りて騎らん日にはかならず主公の財嚢をも借り奉らんといふにぞコスシツコ不審しみてそはまた何故ありやと問ふに使ひ



の者は我等此の馬に乘りて走り候に途中にて貧窮者の恩施を乞ふものある毎にその馬かならず立ち止まりて打てどもあふれども更に歩まず如何にとも詮方なしよりて少しの錢を出して彼の貧窮者に與ふれバ漸くにして歩み出を然るに今日は折惡しく持合せ少かりしかバ忽に施し盡して後には大に困却したりされど施さざれバ歩まざるにより馬を欺きて使の用事を達せるゝとを得たりといひけるとぞ

## (一二)乘馬を贈りて姓名を問はず

(仁愛)

(問)路人ノ痛苦ニハ汝等慇懃ノ情ヲ起サザルヤ如何

唐の世に王義方とて博學多才の聞に高き人あり一歳朝廷より召されて京へ上らんと故郷を發足したる道にて一人の年わかき男の旅路に疲れていと惱ましげなるを見て其の故を問ふに此の男の父羈旅にありて重病に罹りたるよし報知ありしかば此の男急ぎ父の許へ赴き其の病を看護せんが爲に晝夜道を馳せる爲に遂に足を傷ふふて今は一足をはこぶも惱ましといふにぞ王義方深くこれを憐み我が乘るところの馬を下りて彼の男を乘せ急ぎ父の病に走り給へとて其の姓名をも問はずまた我が姓名をも告げずして分れけるとぞ

格言

西諺に曰蠟燭は我が身を耗らして他を照らす

參照

三宅連雄麻呂は越後國蒲原郡の人なり稲千万を蓄へ飢ゑたる者を見ては食を與へ凍たる者を見ては衣を施し又道路を脩理し以て往來を便にせ桓武の朝位階を授け以ておれを褒せ

## (一二三)貧士燭無くして苦學す

(學藝)

晉の世に車胤といふ人あり幼にして勉學の心深かりしかどその家貧しければ夜間書を讀ま



んとせるに油を買ふおとあたはざりしかば夏の間には囊を造りておれに螢數十匹を入れおれを用ひ書を照しておれを讀みしが後に尚書郎の官に登れり

(問)勉學ノ志アリト雖貧困ノ爲メニ妨ゲラルレバ如何ナル工夫ヲ以テ書ヲ讀マンカ

## (一二四)月に從ひて書を讀む

(學藝)

南齊の世に江泌といへる人も少くして學問を好みしが家貧くして油おかりしかば月に隨ひて書を讀み月斜おるに至れば屋上に昇りてその餘光を取り夜中寢ねざりしとぞ

格言

西諺に曰貧困は諸藝の母なり

佛蘭克林の曰學問は勉強にあり

參照

晉の孫康少くして清介妄りに人に交はらず家貧くして油おく嘗て雪に映じて書を讀む後官御史大夫に至る

（一五）踊り自慢の娘　（正直）





（問）虚言ヲ以テ飾ル者ハ自ラ害スルコトナキヤ如何

ある處にて娘等四五人寄り合ひ四方八方の話しの末一人の娘誇りかほに妾は生來甚踏舞を好み幼少よりおれを舞ひ習ひしが好おそ物の上手とかや自負をるにはあらねども此の程ハ至つての妙手とおりて現に先年大坂に居りし時おどはさる晴れの舞臺にて人目を驚かを舞をまひて大喝采を博したるおとありと話すを外の娘はみお默然として傾聽して居たるが忽一人横手を磓と拍ちてされば おそ貴娘の身振

り如何にも踏舞を能くせらるる人からんと推したりしされば大坂までもおし今爰にて其の高妙の舞をまひて我等一同の目を驚かし給はんは如何にといふに他の娘等も口を揃へて夫ゝそ一段の觀物かるべし是非とも爰にて舞ひ給へと迫り立てられ元來ゝの踏舞を自慢せし娘は眞に踏舞を能くせるからず一時の興に乘じて虚言を吐きたるかれば大きに赤面して這這に逃げ去りたりといふ



## (二六)狡猾男の大言

(正直)

ある狡猾かる男一日友人と連れ立ちて輪奐美を盡したる大悲閣の前を過ぐるとき友人に向ひ虚言を吐きていへるは足下此の堂を見給ふべし如何に輪奐美を盡して壯麗堅固の有樣かるらずや抑此の御堂の緣起を尋ぬるに往昔わが祖先かる人靈夢に感ずるとゝろありて一の大悲閣を建立せんとの誓願を發し夫より諸の國國を巡廻して漸に若干の同志者を語らひ千辛

(問人ノ信ヲ得ントス欲セバ正直ヲ以テセンカ將タ巧ニ言ヲ構ヘンカ)

万苦の功績を積みて遂にこの壯嚴を此處に建立したるものかりといと誇りがに說き聞かに友人はつくづくと聞き居たるがやがて少しく笑ひを含みて足下の談感じ入りたり此の堂の緣起さもあるべしよしまたさあらずとも數百年前の足下の先祖また其の建立を助けたる同志者はみな苔の下に埋れたれば誰しも事の信僞を保證せるものかるべし足下は安心して口頭ばかりの大悲閣を建立し給へといひけ



りとぞ

## 格言

老子の曰知るものは言はず
言ふものは知らず

## 參照

宋の劉元城司馬温公を見て心を盡し已を行ふの要を問ふ温公の曰其誠か元城問ふ之を行ふ何をか先にせんと温公の曰妄語せざるより始ると

## (一七)山路の大熊

(信義)

(問)朋友ト共ニ危難ニ遇ハバ己先ヅ逃レンカ如何

朋友二人相連て旅行したるものありしがとある山路へ掛りけるとき向の方より一匹の大熊此方へ向ひ來るに往き遇ひぬ一人の男は疾く此の熊を見認めてけれバ朋友にも斯くと告げて諸共に身を逃るべき筈なるに此の男元來不信切の性なりければ朋友に更に構はず我一身の災を避けんと慌憧しく林の中へ驅け入りとある大木の梢へ攀ぢ登りぬ一人の男は稍遲く



熊を見認しかば最早身を匿さに遑あらざれバ如何はせんと躊躇ひしが屹と思ひ附きて地上へ倒れ伏し僞ハりて既に死せしものの如くして居たりやがて熊も早近近と寄來りしが此の男の倒れ臥そを見て頻りに其の身内を嗅ぎ廻り稍暫く氣息を伺ふ体なりしが既にして立去りぬ木に上りたる男は熊の立去りたるを見て最早氣遣ひなしと徐に木より滑り下り下に臥したる男に向ひて熊は如何にして立去りしと

問ふに彼の熊手を擧げて汝を指し又頻りに首をふりて彼れは友を賣る惡漢なりとの事を教へて立去りたりと答へけるとぞ

〔問身危キ時ハ朋友ヲ欺クモ可ナルヤ如何〕

## （一八）旅人と山賊

〔交友〕

昔二人の男つれ立ちて東山道を旅行したり往きノ〳〵て木曾の山中へ掛りたる時日も早森の茂みへ傾きて足元薄闇がりにおりしかば急ぎ往手の驛路に着きて宿りをも求めん者と足に任せて走る程に一人の男尿もるとて少し後れ



たれば一人の男獨先だちて往きたるにはしたなく山賊に往き遇ひ白刃にて威し附けられ既に衣裳路金をも奪はれんとしてければ此の男困るしきままに惡智慧を出し賊に向ひて說けるやう我等一人の道連あり此者は我等に比べれば路金も多く衣裳もまた價貴きものを着たり今がた尿もるとて少し後れたるが追附け此に來るべければ我れ汝れを嗾かりて足下等に得させべき程に其の賞として我等を宥し給へか

しといふ山賊これを聞きて承諾ひければ足下等は其處等あたりに隱ろひ待ち玉ふべし我等事能く仕果せてまいらせんといふにぞ山賊共は道の邊なる森の茂みへ身を匿しぬ程もあらせず後れし男此處へ來りければ先なる男嫌かりて餘りに急ぎて疲れたるに暫し休ひてまた走りかんといふ此方は嫌からるるとは露バかりも知るよしかけれバさらば休はんと道芝に尻打ち掛け休息をる時先の胸惡男は不意にか



さより掛りて取つて押へ矢庭に帶を引解きてぐるぐる卷きにし人人出候へ事早成就したりといふより山賊バらむら〳〵と走せ出で胸惡男を引捕へて高手小手に縛しめ引据ゑて遂に兩人とも剝ぎ取りたりといふ

## 格言

西諺に曰人を欺く者は人に欺かる

西諺に曰詐欺ある友は公然

の敵より害あり

参照

支那國保靖州の揚大主周錢火兒三人一の痴漢と同じく雨を崖下に避く俄にして虎前に至る三人共に痴漢を推し出し以て虎に當ち忽ち崖崩れ虎驚き去る痴漢反て免るを得三人俱に壓死せ

## (一九)子供と瓢

(悌道)

或老翁子供三人をもちしが兄弟たがひに喧嘩



(問)兄弟爭隙分離シテ各自立スルコトヲ得ルヤ如何

して家のうち常にれだやかあらず翁おれを患ひ百方言葉をつくしてさとしけれども誰れも父の言を須ゐず翁よりて一策を按がへ一日三人の子をよび各瓢一ッづつもち來れといへばその言の如くみな瓢をたづさへきたる翁一子に命じてその一ッを立てしむるに立たず又その二ッを合せ立てしむるも亦たたず翁すなはち三ッをとりひとしく合せておれを立てよりて指し示して曰汝等力を協へ心を同くして合體せると

きはまたおの瓢の如し若れの〳〵はおればおれとおるときハ力よわくしてひとりたち難し故に以來は決して相せめぐおとおかれといとねんごろに戒めたりとぞ

## (二一〇)友愛の眞情裁判官を感ぜしむ

(佛道)

兄弟は同胞とて其の親しき事他人の比に非らざれば其の憂を見ては互に救ふべきは固よりおりされば稚きものといへどもよく心を着げ



ずばあるべからず佛蘭西にルウシイ、ロームと云ふ女子あり容色美麗にして清けおれども麁服を着たりしかバ流民おりとて裁判所に送られたり其の時ルウシイ我は父母に後れて朋友もおし只一人の弟あれども未弱年おれば我が生業を助くべき程の事を爲出す事も能はず故に流離してかかる有樣に至れりといふに裁判役聞きて汝ハ家おき者にて市街に於て乞食をれバ流民に異るおとおしといひて折檻院に送ら

んとせるに折節側より一人の小童勇しげなる顔色にて出來り我此所にあり我姉憂ふるなと勿れと言ひて裁判役の前に立てり裁判役の者之を見て汝は誰ぞと問へば我は此所なる小女の弟ジェームス、ロームと云ふものなりと答ふ又年は幾許ぞと問へば十三歳なりといふ汝何の用有りて此處に來るぞと問へば他事に非ず我今姉に供給をべき道を得たる故取り返さんが爲に來るなりと裁判役の者然らば汝姉の爲



に刻苦せよされど汝の姉の流離せる所由をば辨解せずばあるべからずと諭せば我が母固より病みて有りしが十四五日前の嚴寒に堪へ兼ねて終に歿したる故に困難の餘り思ひ立ちて職人と成り姉を扶助せむと思ひて刷工の許に行きて弟子となりそれより毎日晝は我が食の半を遣り夜は我が臥床に寢させて供給しをきたれども姉はなほ食物の不足なる故にや市街に出でて乞食したる故に遂卒に捕へられたる

（問兄弟姉妹ニテ流離困迫スル時ハ互ニ相救ヒ相依ラント欲スルヤ將タ一身ノ計ヲ先トシテ兄弟ヲ顧ミザランカ）

かり我是に於て更に善き業を尋ねたるに我を養ひて一月に二十フランクの錢を與ふる所を得たる故に此二十フランクの錢を以て姉を扶助せむとそるかりと言へり此の時まで猶姉と處を隔てれきたりしにシエームスロームまた裁判役に向ひて我は姉の側に往かむと思ふを何故に近く事を許し賜はぬぞといふに裁判役此の友愛の心の厚きに感じてルウシーを赦したりければ互に抱持して涙を流せりとぞ兄弟



の情は何國にてもかかるものと知るべし

格言

西諺に曰兄弟は指の如し長く離るべからず

参照

毛利元就將に終らんとそ諸子を枕前に呼び箭數條を取らしむ兄弟の數の如し之を糾して一束とかし之を折らしむ絶つ能ハず單に一條を抽き之を折る隨て折れば隨

て斷つ因て戒めて曰兄弟は猶此箭の如し和せれバ相依り事を濟せ和せざれば折れ易し汝等心に銘じ吾が訓戒を忘るる勿れと

## (二一一)父の教戒宜さを得れば子善に遷ることと速なり〔改過〕

或る農夫にジョンといふ子供あり其の行甚よろしからざりしかば一日父ジョンを呼びていひけるは汝常に吾が教に順はずして惡しき振舞のみをなす甚以て奇怪なりされバ今より後





惡事を一度なせときハ此の柱に釘一本づつを打ちなみ善事をなさバなれを拔き去るべしと定めたりしが後には一日に數十本も打ちなむなとありてなれを拔き去るなとは甚稀なりき是に於てジョンはその柱に釘の集りて蝟の如くなりしを見て大になげき以來は善き童子となりて此の耻を清めんものをと自誓ひ日日善事を務めて少しも怠るなとなかりしかば未幾日ならざるに柱の釘は只一本をあませりその

(問)汝等其過アラバ其僣ニテヤマンカ將タ之ヲ改メテ其過ヲ償ハンカ

時父はジョンを召び殘りの一本を拔き去らんといひければジョンは涙をながして更に悄れたる狀をなせり父これを怪みてその故を問へバジョンはつくづくと柱を打ちながめて釘は漸に拔きつくしたれども其の瘢痕の消ゆざるが歎かハしく候と答へけるとかん過ちを改むるは始めより惡行をなさざるの優れたるに若かずされど速に過を改むること此のジョンの如きは甚善き童子といふべし



## (二二)書齋に名くるに重の字を以てす

(改過)

蘇孤山は近世の碩儒なるが幼き時ハ其の氣質輕躁にして舉動遽忙なりしかバ其の父論語を引てこれを叱り君子重からざれば威あらず學も固からずといひしことありしが孤山既に長じて將に他邦に遊學せんとする時送別の辭を諸友に乞ひしに李紫溟といふ人の贈りたる語ふと同じ論語の語なりしかバ孤山これを見て

(問)人ヨリ己ノ過ヲ指摘サレシ時ハ如何スルヤ

歎息していひけるは予が性質輕躁の失あり先君既にこれを微兆の時に察し紫溟またこれを已に形はるるの後に規したり慎まずバあるべからずとてこれより其の書齋を名けて重齋といひけるとぞ

## 格言

論語に曰過ちては改むるに憚ることなかれ

参照



呂祖謙少き時性氣粗暴飲食一も意の如くならざれば便家什を打破せ家人皆之を患ふ後久しく病む只一册の論語を執り早晩之を讀む忽然覺り得て意思一時に平かに是より身暴怒せず

## (二三)家猫鬪鷄を救ふ

〔友愛〕

東京淺草福井町に鈴木某といふ人ありて家に猫と鷄とを飼へり或時其の鷄隣家の鷄と劇しく蹴合ひしが遂に隣家の鷄の爲に蹴付られて

〔問〕汝等朋友ノ危難ヲ見ル時ハ如何スルヤ

おおかしおに手疵を負ひ朱に染まりて逃げ行くを隣家の鶏得たりとつけ入り既に危く見へけるに椽先に暖まり居たる猫は朋輩の鶏を助けんと矢庭に横合より躍り出でて隣家の鶏に噛み付きけれバ前に負けし鶏も再勢を得て取て返へ〳〵共に隣家の鶏を撃ちておれを仆し凱歌を作りて引揚げたりとぞ

## (二四)猫金絲雀の難を助く（交友）

西洋の或國にアリスと云ふ者ありてナンと云



〔問〕異類ト雖之ヲ馴セバ相親ムコトアリヤ

へる猫を畜ひ置きたるに或時叔母より金絲雀を遣られたりアリスハ此の金絲雀をナンの捕らむおとを恐れて初ハ籠に入れて高く窓に懸けれきたるがいかにもして鳥とナンとを馴させて見むと思ひ時時餌を一器に盛りて飼ひ又金絲雀をナンの背に止らせおどせしかど半月計り過ぎて互に馴れ親しみける故時時一間の内に放ち飼ひたり或日例の如く金絲雀を籠より出して床の邊を飛び廻らせおどして居たる

にナン直に飛びかかり口に咬みて机の上に躍り上れりアリス驚き叫びて汝の舉動如何なる事ぞ汝速に其の鳥を此處にれとせといへども放たず捕へむとそれバ手の及バぬ處に飛び上れりいかゐれバ遽にかかる所爲をバそるゐらんと傍を見れバ開き置きたる窓戸より他の猫の入り來て此の鳥を食はむと爲したるをナンは其の危難を救はむとして咬みて飛びあがりしゐりさてはと思ひ速に其の猫を逐ひ出じて



戸を閉ぢしかバナンは降り來て疵をもつけず其の鳥をアリスの傍にをとせるに鳥もさして怖れたる狀見はざりしとぞ嗚呼一の小畜だも其の朋の危きをみては之を救ふ事かくの如し況や人に於てをや

格言

西諺に曰友達の悲みには早く往け

參照

K121.1

藤善衍と云ふ人鼬鼠を捕へ鐵籠に置きて之を飼ふに一日群鼬來りて悲鳴し相吊するものの如く籠に攀援して去らず之を逐へば乃散じ未幾くからずして復集り遂に籠を啄みて曳き去るあと數十歩あり善衍其義を隣み之を放ち遣る群鼬嬉嬉として拜謝するが如く偕に與に去りしと云ふ

尋常小學校教師用修身書第二終




（修身書第二）

定價金十五錢

明治二十年二月十日版權免許
仝　年二月　出版
仝　年六月廿八日再版御届

編纂兼出版人　熊本縣士族　辻敬之　東京下谷區練塀町十四番地

編纂人　東京府平民　岡村增太郎　東京神田區松永町十九番地

發兌所　教育書專賣所　普及舍　東京下谷區練塀町十四番地


明治四十年以後
許
普及舍版
本書以紙印紙貼付

31
8
72